

# 海を駆ける太陽系

アインスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こんなんあればいいなっていう気持ちで書きました。

後悔はしていない。

以下あらすじ。

元の世界で主人公と死闘を共にしたMS、コアガンダム。

その死闘から幾ばくかの時を経て、一部の人間から忘れかけられた頃。

彼は突然目覚める。

共に答えを探したコアガンダムはその世界で己の答えを探すべく、行動する。

e  
p.  
l  
H  
e  
l  
l  
o  
W  
o  
r  
l  
d

目  
次

e p . 1 H e l l o W o r l d

——ありがとう。

それが最後に聞いた主人の言葉。

使ってくれたこちらとしてもありがたい限りだった。

俺は、主人のためにきちんとやれたのだろう。

凄く、満足した顔をしていたのを覚えている。

あのゲームのようでありアルだった戦いは今でも鮮明に思い出せる。

そうだ、主人が覚悟を決めたあの時。

あの憎きガンダム擬きの頭部を貫いた時、主人が覚悟を決めてくれて俺は嬉しかった。

あのまま前に進めなければ、また後悔してしまうと思って…………。

それから…………それから、何だ？

思い出せない。

せつかく主人と共に作った答えを探す旅路が、その先から思い出せ

ない…………！

何故、どうして、頭が痛い。

あの時俺は確かに…………！

目の前に主人がいる。

でも、段々と遠ざかっていく。

待ってくれ主人！

俺は、まだ主人と旅路を…………！

…………瞬間、視界が光に包まれる。

「…………ん…………？」

潮の匂いがする。

いつか主人が言っていた”海”というやつだろうか。

足元がやけに冷たい。

……打ち上げられているのか、俺は。

おもむろに身体を起こす。

少し離れた場所にシールドとスプレーガンも打ち上げられていた。

「何処だ……は……」

拾ったスプレーガンを点検し、何とか普通に使える事がわかると、腰の後ろにマウントさせる。

やはりというか、頭が若干痛い。

それに、以前の事を思い出そうとすると余計に頭痛がひどくなる。

今は止そう。もつと落ち着いた頃にゆっくりと思いつけよう。

ここで突っ立っていても仕方がないので、ここを探索することにする。

あれから二時間程経った。

どうやら無人島のような……。

現在は島の中心部付近で探索をしている。

探索する途中で幾つかわかった事がある。

俺はコアガンダムだ。水辺で顔を見たのだから間違いない。

そして、主人の事を思い浮かべた時に驚いた事も一つ。

なんと俺自身が主人の姿になったのだ。

これは何の悪戯かわからないが、今後人に会うことがあれば主人の名を名乗らせてもらおう。

……主人には申し訳ないが。

「……………あれは……………！」

ふと大きな森林地帯に入ると、見慣れた戦闘機が墜落していた。墜落した際に付いたであろう葉っぱや土を落とすと、それはさらに明らかとなる。

「アース、アーマー……………」

それは見間違ふことなく、アースアーマーだった。ただ、燃料がないのかうんともすんとも言わない。

参つたなこれは……………と思索しながらアースアーマーの機首に触れていると、そのキャノピーに光が灯る。

なるほど、エネルギーバイパスか何かで俺のエネルギーをアースアーマーに委譲したのか。

そつと手を離すとそれはゆつくりと離陸を始め、俺の目の前でホバリングする。

「乗れ、ということか」

アースアーマーの意思を汲み取り、その上に飛び乗る。どうやら俺の意識した行動をそのまま取れるようだ。恐らく戦闘になれば心強いパートナーになるはずだ。

「……………さて、ここに留まるのはこれくらいにしておくか」

まずはこの無人島から出て、人とコミュニケーションを図ってみなければ。

その意思を感じ取ったのか、アースアーマーはゆつくりと高度を上げる。

さあ、行こう。  
俺の答えを探す旅路へ。

T o b e c o n t i n u e d .